

第2節 景初三年銘三角縁神獸鏡の図像と系譜

神原神社古墳から出土した鏡は、「景初三年」の紀年銘を持つ三角縁神獸鏡である。周知のように「景初」は中国三国の魏の年号であり、その3年はちょうど倭の卑弥呼が魏に最初に朝貢した年（西暦239年）にあたる。このため、この鏡は国民的な関心を集めている邪馬台国問題に関わるものとして注目され、とりわけ近年では、卑弥呼の鏡と呼ばれる三角縁神獸鏡の製作地をめぐる活発な論争の中でひとつの焦点となっている。ここでは、かかる課題を射程に入れつつ、その基礎作業として、この景初三年銘三角縁神獸鏡の図像と系譜を中心とした問題点を整理することにしたい。

1. 景初三年銘三角縁神獸鏡の図像

中国古代の神仙説話に登場する西王母や東王公などの神仙と、神仙界を守護する靈獸とを表現した神獸鏡の中で、景初三年銘三角縁神獸鏡は、その図像配置から同向式神獸鏡に分類される。同向式神獸鏡とは、鉦の上下左右に4組の神像を同じ上向きに配置し、それぞれの間に4体の獸形を入れた四神四獸鏡を基本とする形式であり⁽¹⁾、ここでは景初三年銘三角縁神獸鏡について、その図像を具体的に見ていくことにしよう⁽²⁾。

まず、鉦の上には、横に並列した3体1組の図像がある（写真1-1）。中央の座像は、膝の上のせた横長の箱（琴）に腕まくりした両手を置いており、「伯牙弾琴」の表現とわかる。伯牙は葦状の台に座り、頭を90°横に曲げている。その向かって左には首を垂れた侍者、右には正面を向いて葦状の台に座る鍾子期がいる。

この図像の両側には、体躯を外に向けた獸が鍵状に屈折する「維剛」⁽³⁾（三角縁神獸鏡の銘文にいう「巨」）を口にくわえている。伯牙像の左右に配されたこの2体の獸は、ともに顔の正面を向け、獸の前肩には先端が丸く閉じる羽根、後肩には細い単線の羽根、胴部には小さい円形の斑紋があり、同一の表現となっている。このほか、左の獸がくわえる「維剛」の先端と乳との間には、小さな獸頭が横向きに挿入されている。

鉦の左には、双髻形冠の西王母を中心とする図像がある（写真1-2）。西王母は両肩から双線の羽根が延び、両手を前に合わせて正面を向き、いわゆる龍虎座に座るが、右は長首の鳥、左は線状の細長い首に正面向きの四角い顔を持つ獸となっている。西王母像の上には弓形の華蓋があり、その左端近くを逆位の小さな獸頭が口にくわえている。

鉦の右には、いわゆる三山冠の東王公を中心とする図像がある（写真1-3）。西王母像と対称形になるように、東王公の座は左に鳥、右に獸を配するが、鳥の図像は簡便化して判然としない。東王公は体の中心を少し鉦の方に向いている。その上には弓形の華蓋があり、右端近くを正面向きの小さな獸頭が口にくわえている。

鉦の下は黃帝を中心とする図像であり、この両側に対称的に内向きの獸を配置している（写真1-4）。黃帝は、上を仰ぎ見るよう頭を90°傾け、「く」字形に折れ曲がった「維剛」につながる葦状の座に横向きに座り、左手を差し出している。黃帝の右上には、黃帝に何かを捧げるようにやや前屈の姿勢をとった小さな羽人がいる。両側の獸は、前足を乳のところで踏ん張り、口には黃帝の座から延びてきた「維剛」をくわえている。獸は、ともに顔の正面を向け、獸の前肩には先端が丸く閉じる羽根、後肩には単線表現の羽根があり、右の獸の体躯には小円形の斑紋が見える。口の

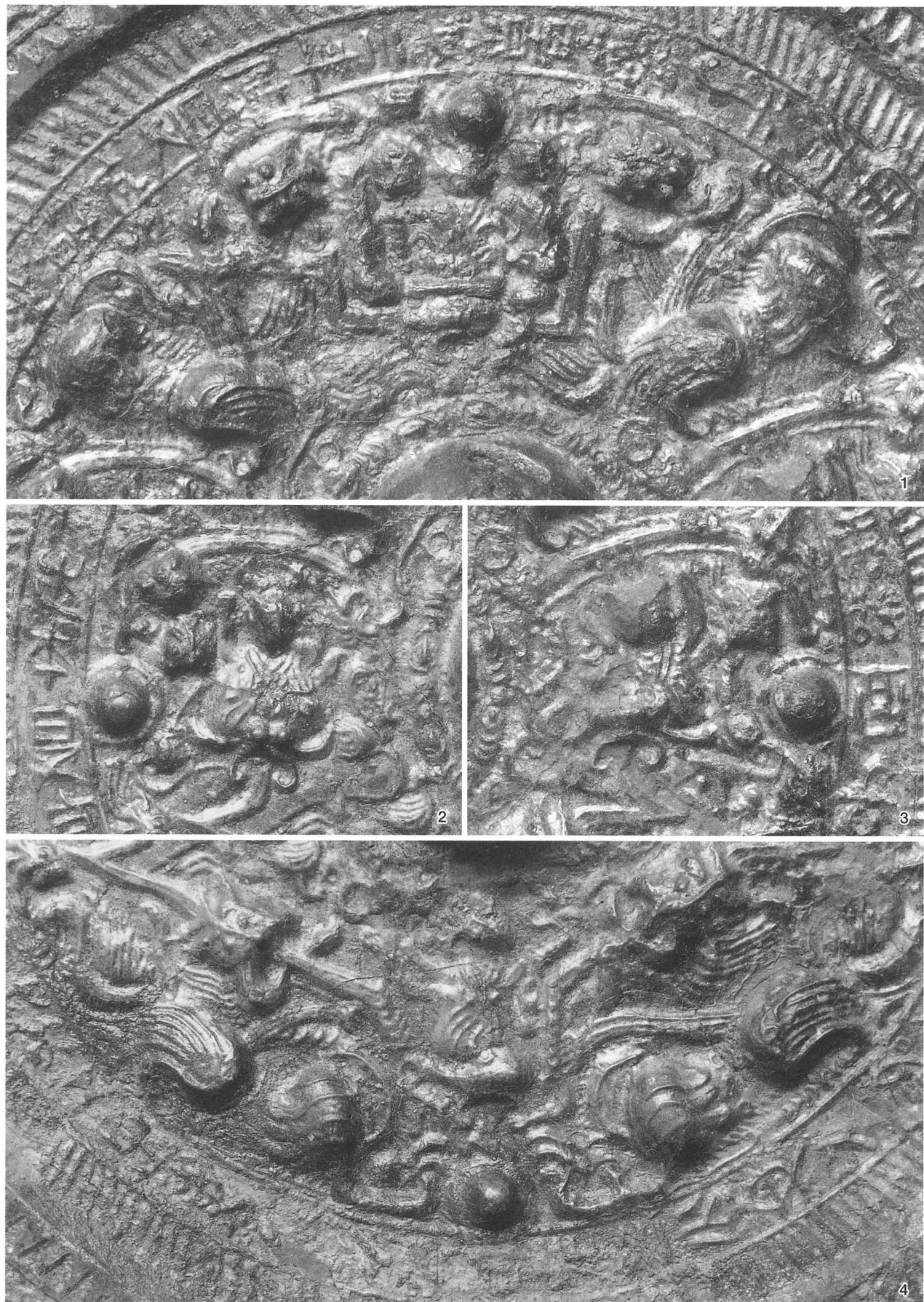


写真1 景初三年三角縁神獸鏡の図像

形状を除けば、伯牙の両側の獸と同じ表現である。獸のくわえる「維剛」は、獸頭の上方で「く」字形に屈折し、それぞれ西王母と東王公の座につながっている。また、獸の後ろにはそれぞれ小さな獸頭が配され、左の獸の右上には1本足で右向きに立つ鳥がある。

以上に示した図像の全体を通観すると、伯牙、西王母、東王公、黃帝を主とする4組の神像は、画紋帶同向式神獸鏡の表現を比較的忠実に模倣しているが、獸の表現は比較的形式化が進んでいる。すなわち、頭だけの小さな獸も含め、獸のすべてが正面向きの顔であり、逆三角形の頭頂からまっすぐに鼻筋が伸び、丸く突起する両眼を見開いた、ほとんど同じ表現となっている。また、図像全体の鋳上がりは必ずしも精良とは言えない。

図像以外のこの鏡の特徴についても、簡単に観察しておこう。鈕は整った半球形で、鈕孔は鈕座から少し上の位置に開き、その方向は上下の乳を結んだ軸線から約12度右に振っている。鈕孔は長方形を呈するが、下側の鈕孔は下辺に甲張りを残したままの歪な形であり、また、鈕座の有節重弧紋は鋳崩れしている。銘帯に接する上下左右の4ヶ所に山高の乳を配している。その円座は乳に比べて小ぶりである。また、鈕座の有節重弧紋に接する4ヶ所に円環紋を配している。

銘文については後に改めて論じるが、伯牙像の右上から反時計回りに41字あり、

景初三年。陳是作鏡、自有經述。本是京師、杜地工出。吏人□□、位至三公。

母人詔之、保子宜孫。壽如金石兮。

と釈読できる（□は判読不明の文字）。また、銘文の始句「景初三年」と末尾の「兮」字との間に、5の目状の珠紋と獸首鏡の獸面に似た線描きの図像⁽⁴⁾とが入っている。銘帯の外には斜行する櫛齒紋帶が巡る。外区には鋸齒紋+複線波紋+鋸齒紋の紋様帶と外周突線がある。鋸齒紋には少し斜めに傾き、間隔がやや不揃いになった、緊張感に欠ける部分がある。

2. 陳是作紀年銘鏡の相互比較

以上の図像観察を踏まえて、「陳是（氏）」という同一工人ないしは同一工房の製作と推測される景初三年銘画紋帶神獸鏡（A鏡）、半円方形帶同向式神獸鏡（B鏡）、景初三年銘三角縁神獸鏡（C鏡）、正始元年銘三角縁神獸鏡（D鏡）、景初四年銘盤龍鏡（E鏡）との比較を行ってみよう。

A鏡は大阪府和泉黄金塚古墳の出土、B鏡は大阪府安満宮山古墳の5号鏡、D鏡は群馬県蟹沢（柴崎）古墳、兵庫県森尾古墳、山口県竹島（御家老屋敷）古墳に同型鏡があり、E鏡は京都府広峯15号墳と辰馬考古資料館（伝宮崎県持田古墳群出土）とに同型鏡がある。神原神社古墳のC鏡を含めて5種8面を数え、鏡式で言えばA～D鏡が同向式神獸鏡、E鏡が盤龍鏡であり、B鏡を除く4種が紀年銘鏡である。

まず、銘文について検討してみよう。中国鏡の銘文には一定のパターン（定型）があり、それともとに脱字や仮借、異句挿入が行われることが普通である。ここに検討するA～E鏡の銘文もその例外ではなく、釈読にあたっては、漢鏡の銘文を踏まえ、最低限この5種の鏡を相互に校勘する方法が正当である。この点で、C鏡の発見後に各銘文を比較した福山敏男⁽⁵⁾や、E鏡の発見を踏まえてさらに詳しく銘文の校勘と解釈を行った笠野毅⁽⁶⁾の方法には学ぶべきところが多い。こうした仕事によって、現状で最も妥当と思われる釈読が行われ、A～E鏡の銘文は4字句が2句ずつまとま

ることが明らかにされた。それを改めて整理すると、次のようになる。

A	景初三年	陳是作		
B		陳是作鏡		君宜高官
C	景初三年	陳是作鏡	自有經述	本是京師 杜地工出
D	□始元年	陳是作鏡	自有經述	本自蒼師 杜地所出
E	景初四年五月丙午之日	陳是作鏡		

A	詔	詔之 保子宜孫		
B		保子宜孫		萬年
C	吏人□□ 位至三公 母人詔之 保子宜孫	壽如金石兮		
D	壽如金石 保子□□			
E	吏人詔之 位至三公 母人詔之 保子宜孫	壽如金石兮		

「詔」のようなほかに例のない用字が A・C・E 鏡に共通することから見ると、ある定型からそれぞれの句を採ったことがわかる。これにより、判読不明文字のある C 鏡の第 5 句は D 鏡によって「杜地命出」、第 6 句は E 鏡によって「吏人詔之」と一応の復元が可能である。ただ、第 5 句の釈文には異論があり、福山は第 19 字を「工」かと疑い、王仲殊は C 鏡を「絶地亡出」、D 鏡を「杜地命出」と釈し⁽⁷⁾、笠野は C 鏡を「□□工出」、D 鏡を「杜地所出」と釈している。私の観察したところでは、C 鏡第 17 字の偏は「糸」ではなく明らかに「木」につくっており、その最初の 2 字は D 鏡の「杜地」とほぼ同じ字形である。また、第 19 字は福山や笠野のように「工」と釈するのが穩当であり、D 鏡のそれは笠野のように「所」と釈しておきたい。このほか、欠損している D 鏡の第 1 句の年号は、既に指摘されているように、この 4 種の鏡の共通性から見て景初三年の翌年にあたる「正始元年」が妥当であり、末句は C 鏡の第 9 句と第 10 句が倒置されたもので、「保子宜孫」と釈すことができよう。

以上の釈文を認めるならば、そこからさらに、この 4 種の紀年鏡の銘文は、現状では C 鏡の銘文が定型となっていたと見ることが可能である。すなわち、A 鏡は C 鏡の第 3 ~ 8 句と第 10 句のほとんどを省略したものであり、D 鏡は C 鏡の紀年と第 4 句の文字を置き換え、第 6 ~ 8 句を省略し、第 9 句と第 10 句を倒置したものであり、E 鏡は C 鏡の紀年を変更して月日を挿入し、第 3 ~ 5 句を省略したものと考えられる。したがって、C 鏡の紀年が正始元年の D 鏡や景初四年の E 鏡より 1 年早いことを考え合わせると、この銘文の変異を時間的な前後関係、すなわち、C 鏡 → A・D・E 鏡という系列関係で理解することが可能となる⁽⁸⁾。

また、紀年銘がなく、半円方形帯の方格に 1 字ずつ銘のある B 鏡は、銘文が短いために「陳是作鏡」と「保子宜孫」の 2 句がほかの鏡と共通するだけだが、A 鏡と同じ「陳是」の作品であるほか、後漢代の画紋帶神獸鏡と違って、鉢から見るように銘文を入れる特異な手法も A 鏡と共通している。

次に、図像について検討しよう。盤龍鏡の E 鏡は別として、同向式神獸鏡に分類される A~D 鏡の図像配置と表現がほぼ同一であることは、つとに指摘されたとおりである。安満宮山 5 号鏡

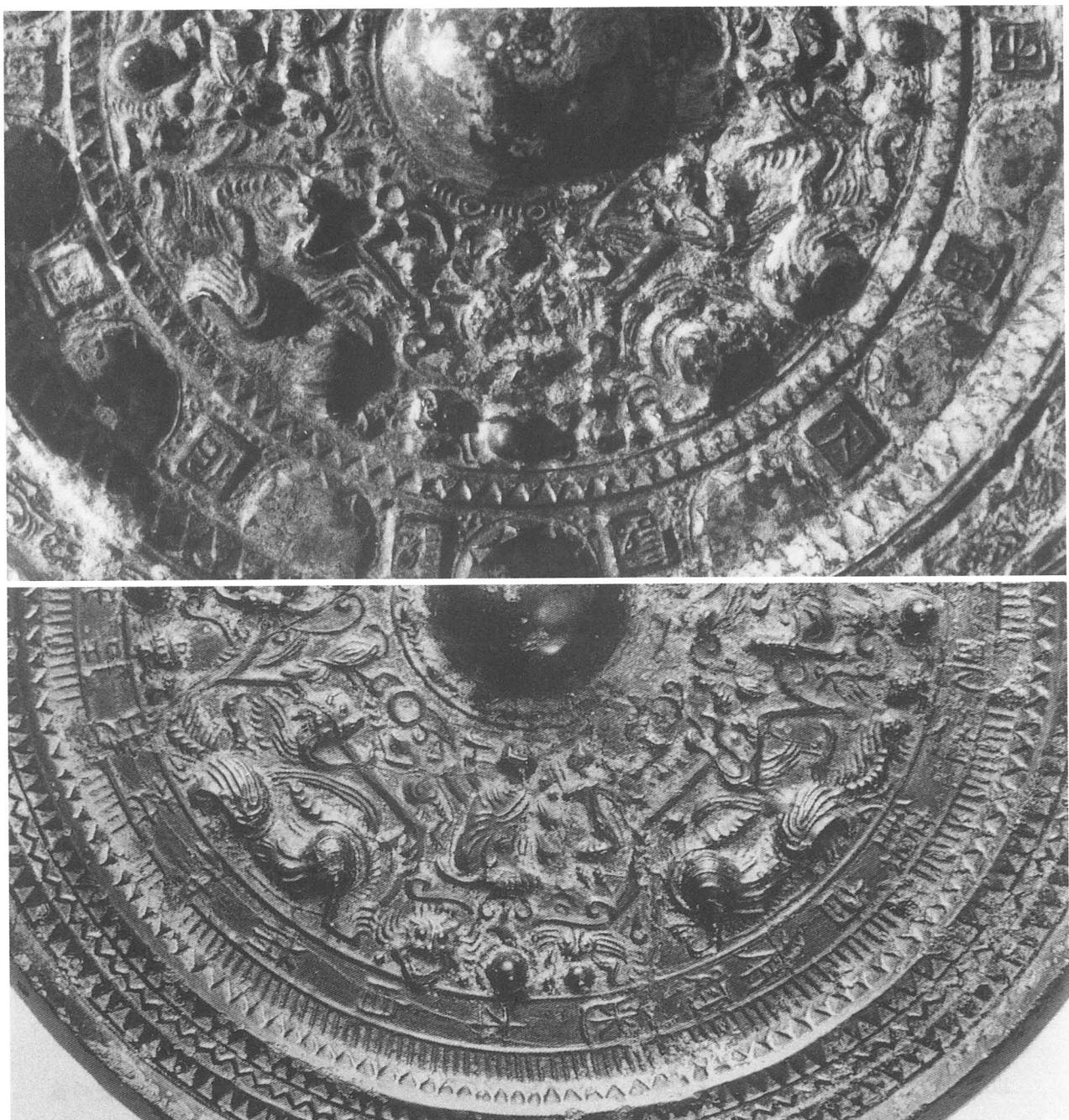


写真2 景初三年銘画紋帶神獸鏡（上）と正始元年銘三角縁神獸鏡（下）の図像

（上：大阪府黃金塚古墳出土 東京国立博物館蔵 下：群馬県蟹沢（柴崎）古墳出土 東京国立博物館蔵）

（B鏡）が発見されたとき、それがA鏡とC鏡の中間的な型式を持ち、三角縁神獸鏡の創出段階の試作品であると私は指摘した⁽⁹⁾。一方、森田克行は、鉢座、円環・乳、半円方形帶・銘帶、外区紋様、断面形を相互に比較し、A鏡（径23.0cm）とB鏡（17.6cm）とは、直径の差が大きく、A鏡→B鏡ではなく並列の関係にあるが、画紋帶神獸鏡（祖型）→A・B鏡→C鏡→D鏡の順に変化したことを想定した（第14表）⁽¹⁰⁾。ところが図像に着目すると、それぞれ微妙に相違していること、結論から言えば、A鏡からD鏡は一系列の段階的な変化を辿ったのではないことに気付く。そこで、先のC鏡の観察を踏まえ、この4種の図像を詳しく比較してみよう（写真2）。

第一に、右下の獸形がC鏡では正面向きの顔を持つのに対して、A・B・D鏡では横向きの顔となっている。祖型となる画紋帶同向式神獸鏡ではそれが横向きの顔を持つから、A・B・D鏡の方

がモデルにより忠実であると言える。先に指摘したように、C鏡では、頭だけの小さな獸も含め獸のすべてが正面向きの顔であり、逆三角形の頭頂からまっすぐに突線状の鼻筋が伸び、丸く突起する両眼を見開いた、ほとんど同じ表現を持ち、より形式化が進んでいるように見える。

第二に、A・D鏡では下の乳の左側に口を開けた獸面、右側に卷貝形の体から長い鬚の顔を出した怪物像があるのに対して、B・C鏡ではその両方を省略し、黃帝像の左右の獸がそれぞれ前足を伸ばしてその空間を埋めている。ここに小さな獸像を入れるのは後漢代の画紋帶同向式神獸鏡に通有のことではないが、A・D鏡にある乳の右側の図像は林巳奈夫が「蟲形水神」と呼んだ靈獸であり⁽¹¹⁾、樂浪貞柏里3号墓から出土した画紋帶同向式神獸鏡⁽¹²⁾の黃帝像の下にあるものと同じ表現である。

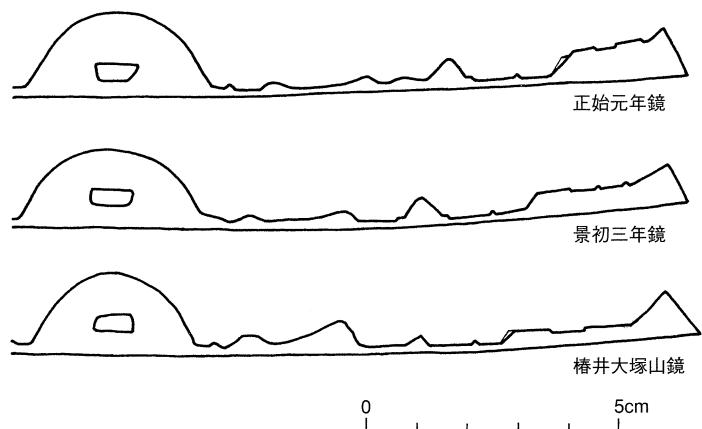
図像に見るこの変異は、銘文やその紀年のようにA鏡→B鏡→C鏡→D鏡という系列では説明がつかない。むしろ逆にA・D鏡→B鏡→C鏡という形式化、省略化の系列変化として理解できる。あるいは、画紋帶同向式神獸鏡の祖型をもとに、A鏡、B鏡、C鏡、D鏡が別々につくられた可能性もある。ただし、上記の2点の相違を除けば、C鏡とA・D鏡の図像構成や表現はほとんど同じであるから、その場合でも同一のモデルを想定するのが妥当である⁽¹³⁾。いずれの可能性を考えるにせよ、景初三年のC鏡は同じ景初三年のA鏡や正始元年のD鏡より図像の形式化が進んでいることは疑問の余地がなく、C鏡の粗雑な外区鋸歯紋を見れば、一層その感を強くする。

これに関連して、外区と周縁の断面形態を見ておこう。外区と周縁の厚みが次第に扁平化し、外区の内側斜面の鋸歯紋が消失することは、三角縁神獸鏡の型式編年の重要な指標のひとつとされ、とりわけ分厚い外区と外区斜面に鋸歯紋を持つ正始元年のD鏡は、その最初期に位置付けられている⁽¹⁴⁾。すなわち、第85図に示したように、D鏡は内区に比べて外区がかなり厚く、その周縁は僅かに断面三角形に突出するに過ぎない。そして、外区の厚みの分だけ幅広になった外区斜面に鋸歯紋を施し、外区上面に鋸歯紋+単線波紋+鋸歯紋の紋様帶と外周突線を巡らせている。ただ、これほどに分厚い外区断面と紋様帶の単線波紋とは、ほかの三角縁神獸鏡には例がなく、これに続く型式との懸隔も大きい。

ところが、景初三年のC鏡は、外区断面の厚みがD鏡に比べて少なく、外区斜面の鋸歯紋もない。外区断面は、三角縁神獸鏡の中ではまだ厚い方であり、三角縁神獸鏡に通有の鋸歯紋+複線波

第14表 同向式神獸鏡の比較（森田注10論文をもとに改変）

		祖 型	A 鏡	B 鏡	C 鏡	D 鏡
内 区	鉢 座	有節重弧紋	有節重弧紋	素 圓	有節重弧紋	有節重弧紋
	円 環・乳	円 環	乳	乳	乳	乳
	紋 様 帯	半円方形帶 (銘)	半円方形帶 (銘)	半円方形帶 (銘)	銘帶+ 櫛齒紋	銘帶+ 櫛齒紋
外 区	斜面鋸歯紋	○	○	○	×	○
	紋 様 帯	画 紋 帯	画 紋 帯	鋸 齒 紋	鋸 齒 紋	鋸 齒 紋
	断 面	平 縁	平 縁	平 縁	三 角 縁	三 角 縁



第85図 三角縁同向式神獸鏡の断面形態

様帶を持つ。しかし、B鏡と同じように、C・D鏡に見られた外周突線はない。周縁の断面は三角形に高く屹立し、三角縁と呼ぶにふさわしい形態である。

第85図のように3種の三角縁同向式神獸鏡の断面形態を並べてみると、あたかも上から下に外区の扁平化と周縁断面の三角縁化が進んでいるように見える。それはまた、三角縁神獸鏡の型式編年において想定された変化の方向とも一致している。もっとも、外区の紋様を見ると、外区紋様帶は正始元年のD鏡が単線波紋であるのに対して、景初三年のC鏡と椿井鏡とは複線波紋であり、外区斜面の鋸歯紋はD鏡と椿井鏡にあるのに対してC鏡ではなく、必ずしもすべてが一系列に整合的に説明できるわけではない。だが、どちらかと言えばD鏡→C鏡のほうが理解しやすいことは確かであろう。

景初三年のA鏡とC鏡、正始元年のD鏡、この3種の同向式神獸鏡は、その紀年に従えばA・C鏡→D鏡となり、A鏡とC鏡との前後関係はわからないが、D鏡はその翌年に位置付けられる。また銘文の省略から見ると、C鏡→A・D鏡という系列関係で理解することができる。

一方、図像の省略と形式化から見ると逆にA・D鏡→B鏡→C鏡という系列関係が想定され、断面形態ではB鏡→D鏡→C鏡の系列関係が支持されよう。この矛盾はどのように解釈できるだろうか。このことについて、まず、この鏡群が「陳是」という同一工房の製作にかかることと、その紀年に製作されたことを前提に考える。この「陳是」の工房ではA鏡の画紋帶神獸鏡とC・D鏡の三角縁神獸鏡、およびその中間形態のB鏡という異なる外区・周縁形態を持つ同向式神獸鏡のほかに、盤龍鏡（E鏡）など多様な鏡を、景初三年から翌正始元年までの、1年前後の短期間のうちに製作している。それは、魏鏡説、渡来工人説、いずれの立場でも承認されている⁽¹⁶⁾。

この段階には各種の神獸鏡や画像鏡にとどまらず、盤龍鏡や獸帶鏡など、さまざまな後漢鏡をモデルに一連の三角縁神獸鏡が創出されたのであり、モデルに比較的忠実な景初三年銘画紋帶神獸鏡や景初四年銘盤龍鏡、あるいは小林行雄が同範鏡1番とした平縁尚方作獸帶鏡⁽¹⁷⁾なども同じ体制の中で試作された。「陳是」はその中のひとつのグループであった。画紋帶環状乳神獸鏡の内区を模倣した三角縁吾作環状乳神獸鏡（京大目録⁽¹⁸⁾30番）や正始元年のD鏡などは周縁断面が三角形にはならないが、三角縁神獸鏡の創出期においては、「三角縁手法」が安定しないため、多様な断面形態を持ったと福永伸哉は考えている⁽¹⁹⁾。この考え方を敷衍すれば、C鏡とD鏡に見る断面形

紋+鋸歯紋という紋様帶と外周突線を巡らせ、僅かに突出する斜縁状の周縁断面形となる。外区に続く周縁素紋帶の幅はD鏡より広いが、断面の厚みがない分だけ周縁端面が狭くなっている。

参考までに、京都府椿井大塚山古墳出土の三角縁獸紋帶同向式神獸鏡の断面を見ておこう⁽¹⁵⁾。外区断面の厚みはC鏡よりも薄いが、外区斜面には鋸歯紋を入れ、外区は鋸歯紋+複線波紋+鋸歯紋の紋

態や外区紋様の変異は、この多様性の範囲内で十分に説明できるだろう。同じように、年代的に先行するC鏡の図像に見る省略と形式化、無頓着とも言える外区鋸歯紋の乱れについても、試作段階におけるモデルの模倣度や製作工人の熟練度の変異の中に収まるのではなかろうか。

三角縁神獸鏡は、大量生産を目的とした特殊な態勢のもと、後漢鏡の紋様要素の模倣、神獸像配置の目まぐるしい組み替え、紋様要素の部分的変更を短期間のうちにやっており⁽²⁰⁾、型式変化のあり方は、一型式の時間幅が10年以上もある漢鏡とは随分違っている。図像や断面形態の型式変化は、単純に時間系列として理解すべきではなく、そのことに三角縁神獸鏡の特殊な製作状況が暗示されていると考える。

3. 同向式神獸鏡の系譜

画紋帶同向式神獸鏡の内区図像を採り入れて三角縁同向式神獸鏡が試作されたことは、既に論じたとおりである。ここでは神原神社古墳から出土した景初三年銘三角縁同向式神獸鏡を、画紋帶神獸鏡と三角縁神獸鏡の全体の流れの中に位置付け、問題点を整理してみたい。

画紋帶同向式神獸鏡について、樋口隆康は次のように分類した。A類は、下方の2体の獸が内向き、上方の2体が外向きの側面形で、各区を分割する乳がないもの、これをさらに、4組の神像・獸像がいずれも単像で、副像や充填紋、画紋帶もない簡単なAa類と、精緻な図像を持つAb類とに細分した。景初三年と正始元年の陳是作同向式神獸鏡は、このAb類にあたる。B類は、4体の獸とも乳をめぐる蟠龍形のもので、単像式の簡単なBa類と、複合神像に複雑な副紋を配したBb類とに細分した。そして、画紋帶同向式神獸鏡は「三国晋代を盛行の頂点として、あるものは南北朝代にも及んだ」という年代観を示している⁽²¹⁾。

近年では、小山田宏一が画紋帶同向式神獸鏡の詳細な検討を行い、基本的に樋口の分類に従いながら、外区画紋帶の雲車の系列によって、それは2世紀末から3世紀初頭に出現し、3世紀第1・第2四半期に製作盛期があったとする⁽²²⁾。

画紋帶神獸鏡の変遷の大略は、西王母と東王公の陰陽二神の力を伯牙の弾く琴によって整える宇宙觀を表現した三神三獸形式の環状乳神獸鏡から、伯牙の対極に黃帝を配した四神四獸形式の環状乳神獸鏡が2世紀後半に創出され、それを基本に四神四獸形式の対置式神獸鏡と同向式神獸鏡が分岐したのである。紀年鏡で見ると、四神四獸形式の環状乳神獸鏡には、永康元(167)年と中平四(187)年があり、対置式神獸鏡は建安廿一(216)年、同向式神獸鏡は建安廿(215)年が確実な最古のものであり、特に獸の肩と腰に環状乳の名残りを留めた黃初二(221)年同向式神獸鏡や初期の対置式神獸鏡などから、およそ3世紀初頭に、環状乳神獸鏡から対置式神獸鏡と同向式神獸鏡が分岐したと考えられる。

一方、四神や多数の神仙像を同一方向に配列した重列式神獸鏡が別の系列をなし、建安六(201)年鏡が確実な最古のもので、3世紀前半に盛行した。このほか、神獸鏡系統の独立した獸形を持つ四獸鏡があり、紀年鏡では中平六(189)年銘四獸鏡が知られている。

画紋帶同向式神獸鏡は、紀年を持つAa類同向式神獸鏡とそのほかの型式との前後関係は明らかにできないけれども、以上のような画紋帶神獸鏡全体の流れから見ると、いずれの型式も小山田の推測するようにAa類と同じ3世紀初頭に出現したものと考えられる。

中国での製作地は、Aa類は江南に特定できる。そのほかの型式については類例に乏しいが、中



写真3 京都府椿井大塚山古墳出土三角縁同向式神獸鏡（京都大学総合博物館蔵）

国で出土地の判明しているものに、Ab類では江西省南昌⁽²³⁾、広東省英德⁽²⁴⁾、Bb類では河南省偃師杏園926号北魏墓⁽²⁵⁾、安徽省寿県茶庵馬家古堆後漢墓⁽²⁶⁾、江蘇省盱眙⁽²⁷⁾の例があり、型式によって分布の偏りがある。これが製作地や系統の差を示すのかどうかは、今後の検討が必要であろう。

景初三年銘画紋帶同向式神獸鏡は、この3世紀初頭に出現したAb類同向式神獸鏡をモデルに円錐形に突出する乳を加えてできたものであり、また、同じモデルの内区図像を取り入れて景初三年と正始元年の三角縁同向式神獸鏡が別々に改作されたのである。そのモデル鏡と景初三年・正始元年鏡との時間的懸隔は十数年程度と推測する。

三角縁銘同向式神獸鏡には、このほか先述の京都府椿井大塚山古墳の獸紋帶同向式神獸鏡（京大目録9番、同型鏡は岡山県湯迫車塚古墳、三重県久保古墳、静岡県上平川大塚古墳にある）や山口県宮ノ洲古墳の半円方形帶同向式神獸鏡（京大目録11番）がある⁽²⁸⁾。

椿井鏡（写真3）は、景初三年・正始元年鏡と同じようにAb類同向式神獸鏡をモデルとするが、西王母を求心配置に改変し、三角縁神獸鏡に独特のいわゆる蓮華座笠松形紋様と「天王日月」銘獸紋帶を持つところから、三角縁神獸鏡としての特徴が一層強く表れている。断面形態についても同じことが言える。これに対して内区の図像表現は、製作工人が画紋帶神獸鏡の図像に熟知していたのか、それともモデルの図像に忠実であったのか、いずれにせよ景初三年・正始元年鏡より格段に精細である。三角縁神獸鏡への改変要素を除けば、景初三年・正始元年鏡と図像構成が同じであり、特に黃帝像の下に獸面を配した例の少ない特徴までが共通することから、同一モデルを用いた可能性も否定できない。仮にそうであるならば、この椿井鏡が三角縁神獸鏡の特徴を強く持つこと

と精緻な図像表現であることとは一見矛盾し、景初三年・正始元年鏡との前後関係の判断にも苦しむところであるが、先に論じたように、この変異は三角縁神獸鏡の試作段階における多様性の中で許容できるのではなかろうか。

一方の宮ノ洲鏡は、四獸が蟠龍形に乳を巡る画紋帶同向式神獸鏡Bb類をモデルに、いわゆる蓮華座笠松形紋様を加え、外区・周縁を三角縁神獸鏡として改作したものである。方格内の銘文は「□作明竟佳且好明而日月世□」で、作鏡者の部分が欠損しているのは残念だが、図像紋様から見て景初三年・正始元年鏡とは別系列と考えてよいだろう。

以上のように、2種類の画紋帶同向式神獸鏡をモデルに、景初三年銘画紋帶同向式神獸鏡と少なくとも4種類9面の三角縁同向式神獸鏡が造られた⁽²⁹⁾。この三角縁同向式神獸鏡は舶載といわれる140種類400面前後の三角縁神獸鏡の中での少数派であることに加えて、モデルから離れて三角縁神獸鏡の一種としてその後に継承されることがない、試作段階の作品である。1年前後の短い期間に相次いで造られたにも関わらず、同一モデルを用いた景初三年銘画紋帶同向式神獸鏡と3種類の三角縁同向式神獸鏡には、相互に図像構成とその表現、銘文の長短、断面形態などに決して小さくない変異が認められた。しかし、その変異の中に椿井鏡に見るようないわゆる笠松形紋様や獸紋帶、三角縁が出現していることは、三角縁神獸鏡の創出過程を考察する上で同向式神獸鏡が非常に重要な位置を占めていることを教えるものである。

(岡村秀典)

註

- (1) 樋口隆康「画文帶神獸鏡と古墳文化」(『史林』第43巻第5号、1960年、『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集、新潮社、1983年に再録)、樋口隆康『古鏡』(新潮社、1979年)。
- (2) 図像の考証には林巳奈夫「漢鏡の図柄二、三について」(『東方学報』京都第44冊、1973年、同『漢代の神神』、臨川書店、1989年に再録)によるところが多い。
- (3) 画紋帶神獸鏡の銘文に「天禽四守(獸)、銜持維剛(天禽四獸は維剛を銜持す)」とあり、三角縁神獸鏡には「上有神守(獸)及龍虎、身有文章口銜巨(上には神獸及び龍虎有り、身には文章(文様)有り、口には巨を銜む)」という(西田守夫「環状乳神獸鏡の図像」『弥生』No.14、東京大学考古学研究室談話会、1984年)、同「三角縁対置式系神獸鏡の図紋」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、1993年)。
- (4) 笠野毅「景初三年・正始元年・景初四年の陳氏作鏡銘の解釈」(『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集、1994年)。鏡の現状は獸面のところが鋳によって模糊としているが、X線写真ではそれが識別できる。
- (5) 福山敏男「景初三年・正始元年三角縁神獸鏡銘の陳氏と杜地」(『古代文化』第26巻第11号、1974年)。
- (6) 笠野毅 註4論文、笠野毅「三角縁神獸鏡は語る」(平野邦雄編『古代を考える 邪馬台国』吉川弘文館、1998年)。
- (7) 王仲殊『三角縁神獸鏡』(尾形勇・杉本憲司訳、学生社、1992年)。
- (8) 菅谷文則『日本人と鏡』(同朋舎、1991年)は、C→E→D→Aの省略を論じる。しかし、E→D、D→Aの省略はありえない。A鏡、D鏡、E鏡はC鏡の銘文をそれぞれ個別に省略した、並列の関係にある。
- (9) 岡村秀典「安満宮山古墳の青龍三年鏡出土」(『毎日新聞』1997年8月7日)。なお、本稿の執筆経緯をここに簡単に記しておきたい。松本岩雄氏のご高配によって1995年に神原神社古墳の鏡を調査し、1996年に本稿の第1稿を編者に提出した。その一部の内容は「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」(『考古学と実年代』埋蔵文化財研究会、1996年)に発表したが、そこでは神原神社鏡をA鏡、和泉黄金塚鏡をB鏡、正始元年銘鏡をC鏡、景初四年銘鏡をD鏡としている。ところが、翌1997年に安満宮山古墳が発見されたため、本稿では新たにその5号鏡と第14表を加えて補訂し、A~D鏡の指示する鏡も変更した。
- (10) 森田克行「青龍三年鏡とその伴侶—高槻市宮山古墳をめぐって」(『古代』105号、1998年)、鐘ヶ江一朗編『安満宮山古墳』(『高槻市文化財調査報告書』第21冊、2000年)。

- (11) 林巳奈夫 註2論文。
- (12) 関野貞編『楽浪郡時代ノ遺蹟』(『古蹟調査特別報告』第4冊、1927年)。
- (13) 小山田宏一「画文帶同向式神獸鏡とその日本への流入時期」(『弥生文化博物館研究報告』第2集、1993年)がC鏡とA・D鏡との図像構成の相違を指摘したのは支持できるが、それをモデルの違いと考えたことには賛成できない。
- (14) 断面形態の変異については、西田守夫「三角縁神獸鏡の形式系譜緒説」(『東京国立博物館紀要』第6号、1970年)が早くに着目し、新納泉「權現山鏡群の型式学的位置」(近藤義郎編『權現山51号墳』、1991年)が型式編年の指標とした。神獸像表現の系列を整理した岸本直文もこれを支持している(「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会40周年論文集、1995年)。
- (15) 椿井大塚山古墳出土鏡の観察にあたり、京都大学文学部博物館(当時)の森下章司氏にお世話とご教示をいただいた。
- (16) 三角縁神獸鏡の製作地を日本列島に考える立場でも、景初三年鏡は西暦239年、正始元年鏡は西暦240年の製作と考える説(王仲殊 註7、菅谷文則 註8)と、どちらの紀年銘も後の時代に仮託されたと考える説(森浩一「金印と銅鏡の語る倭人」森浩一編『日本の古代1 倭人の登場』中央公論社、1985年)がある。ただ、仮託説は根拠に乏しく、ここでは取りあげない。
- (17) 小林行雄『古墳時代の研究』(青木書店、1961年)。京都府一本松塚古墳と兵庫県吉島古墳に同型鏡がある。また、大阪府万年山古墳から出土した獸紋縁浮彫式獸帶鏡は、一見、後漢代の獸帶鏡とまがうほどだが、この同型鏡と図像構成、表現、銘文が基本的に一致し、同時期につくられた魏鏡の可能性が高い(岡村秀典『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館、1999年)。
- (18) 京都大学文学部考古学研究室編『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』(京都大学文学部博物館図録、1989年)。
- (19) 福永伸哉「魏の紀年鏡とその周辺」(『弥生文化博物館研究報告』第3集、1994年)は、画像鏡から三角縁を取り入れたのではなく、三角縁神獸鏡の中で三角縁がつくられた可能性を考える。
- (20) 森下章司「文様構成・配置からみた三角縁神獸鏡」(註18所収)。
- (21) 樋口隆康 註1。
- (22) 小山田宏一 註13。小山田はさらに樋口の求心式神獸鏡を画紋帶同向式神獸鏡D型式としたほか、その各型式に「異式鏡」を設定し、それが3世紀末まで続くと考えている。「異式」なるものの型式学的定義が明示されていないが、その年代観には賛成できない。
- (23) 『中国江西省文物展』(岐阜県美術館、1988年)。
- (24) 陳松南「廣東英德出土一件漢末神獸鏡」(『文物』1992年第8期)。
- (25) 中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」(『考古』1991年第9期)。
- (26) 安徽省文化局文物工作隊・寿県博物館「安徽寿県茶庵馬家古堆東漢墓」(『考古』1966年第3期)。
- (27) 秦土芝「盱眙県出土東漢神獸鏡」(『文物』1986年第4期)。
- (28) 三角縁同向式神獸鏡としてほかに愛知県東之宮古墳出土鏡(京大目録12番)があげられているが、これは斜縁二神二獸鏡の一種であり、三角縁神獸鏡に含めるべきではない。東之宮鏡と同じように屈曲する「維剛」を配した斜縁同向式神獸鏡が山東省滕州から出土し、わたしは徐州系統の鏡と推測している(岡村 註17)。
- (29) 京都府椿井大塚山古墳の鏡片(京大目録10番)と奈良県桜井茶臼山古墳の鏡片(千賀久編『大和の古墳の鏡』橿原考古学研究所附属博物館考古資料集第1冊、1992年)が三角縁同向式神獸鏡の可能性が指摘されている。